

国士館の思い出

人間形成の礎となった四年間

体育学部一八期生 板倉 紀之



はじめに

昭和四八年四月、国士館大学体育学部に入學し、多くの経験を積み、視野を広め、昭和五二年三月無事卒業した。運良く、静岡県教職員採用試験に合格していたので、母校である旧相良町立相良中学校（現牧之原市立相良中学校）に勤務することができた。

静岡県中南部の風光明媚な駿河湾の西端の地域周辺の中学校で勤務させていただき、以来三八年の歳月が流れ、平成二七年三月、無事定年退職することができた。大学卒業後は、多忙さにかまけて母校を訪問する機会はありませんでしたが、「国士館大学新聞」が定期的に届くようになり、国士館大学の最新情報を得ることができ、

併せて往時を懐かしく思い出すことができた。

平成二九年の一〇〇周年事業の一環として在学中の資料を収集しているとのことで、平成二八年五月には大学の時代の四年間の講義ノートや書籍を持参し、国士館史資料室を訪問した。その後担当者より『国士館史研究年報 楓原』の寄稿依頼を受け、ペンを取った次第である。

一 体育教師を夢見て

「先生！俺、体育の教員になりたいです。」

これは、私が高校二年生の時に、進路面談で担任の先生に答えた当時の気持ちである。

中学生の頃漠然と抱いた夢も体育教師であり、高校生生活を過ごしていく中で、その夢が更に強くなっていく

た。

中学入学と同時にバスケットボールに出会い、小さな大会で優勝の経験をし、さらに、高校に進学してバスケットボールの専門家の体育教師との出会いもあり、バスケットボールに明け暮れた高校生活であった。

部活動の恩師も体育大学出身で、国士館大学を薦めてくれ、国語科の恩師は国士館大学出身であり、私の進路決定に親身になって応援してくださった。自信は無かったが、運良く合格し、夢の実現に向けてのスタート台に立つことができた。

私が生徒の頃、夏になると毎年のように「国士館大学剣道部」が地元静岡の旧相良町に合宿に訪れ、それはそれは凜凜しい出で立ちであった。当時は剣道には興味はなかったが、学生達が集い一種の風物詩でもあった。

私が「国士館大学」に入学したのはこのこととは関係ないが、振り返ってみれば何かしらの「縁」があったのかと不思議にも思える。

二 郷土出身の先生

私は静岡県の最南端の御前崎市の隣の牧之原市（旧相良町）出身である。海岸線に立てば雄大な日本一の富士

山が聳え、駿河湾から見える伊豆の山々、そして、見渡す限り洋々とした太平洋は、郷土の誇りであり日本を象徴する場所であると言っても過言ではない。

さて、国士館大学には同郷であり、国士館大学剣道部監督だった矢野博志先生がいらっしやう。また、奥様も同じ町内出身であり、私にとつては何かとご縁もあり、心の支えになり、大変心強かった。ご自宅にも何度となくお邪魔し、公私共にお世話になった。

矢野先生は、私が在学中に「剣道世界選手権」に出場し、見事優勝したことも記憶に残っている。体育学部では一年次と三年次に剣道の授業があり、その際にも世界一の「剣道」を披露してもらい勇気をいただいた。

大学には北海道から沖縄まで、日本全国から学生が集まり、その中での同郷つながりは本当に「縁」を感じたものである。

三 大学（寮）生活のはじまり

昭和四八年四月一二日。

父母と共に車に布団と一箱の衣類を積んで上京し、世田谷松陰寮に入寮した。私はバスケットボール部に入学したため、二階の二二五号室に入室した。なんと、キャ

プテン部屋で、他は三年生、二年生各一名ずつで、他の部屋とは違っていた。手続きが終わり、父母と別れた後、急に不安でいっぱいになった。

四月一六日、他の学部も含めての「国士館大学入学式」が剣道場で挙行された。制服（当時は大学生の制服も減少傾向であったが、伝統の黒の蛇腹が入った学生服）に身を包み、緊張感でいっぱいだった。

参列した父は「教育勅語」を聞き、たいへん感銘を受けていた（正直私には何の意味なのかさっぱりわからなかったが：）。

あとで、父から戦前から戦後しばらくは、日本国民の「教育」の大柱であったと聞かされた。当時は大人も子供たちも暗唱して、集会の度に唱和していたとのことであつた。

いよいよ松陰寮での生活がスタートした。

二年生から「寮生活の規律」を聞き、上級生との関わり方や挨拶の仕方・食事・掃除・洗濯等、事細かに指導をされた。

まずは、早朝五時起床で全寮生揃っての「点呼」である。松陰寮生全員が制服に身を包み、玄関前の砂利道に各部ごとに整列し、人員点呼をしてから寮歌を歌い、舎監の先生の指示を聞いて一日がスタートした。



松陰寮 225 号室にて（左が筆者、キャプテン河野英美氏と）

点呼が終わり、部屋に戻ってからは掃除に洗濯、雑用が終わると食券をもって地下の食堂に行き、やつと食事を摂ることができた。

上級生は第一限の講義もなく、ゆつたりとした生活ができるが、一、二年生は休む間もなく校舎に向かった。体育学部の校舎に行き一、二年生だけであるため、上級生に気兼ねしなくても良く、唯一安らぎの時間であった。他のクラブの同級生と様々な話をする、どの部も相通ずる厳しさがあることもわかり、自分だけが辛い思いをしているのではないということ、お互いに我慢していること等、わずかな希望が持てた。

親の期待にも応えなくてはならず、また、自分の甘さや弱さにも負けたくない思いで、どんなに辛くとも寮生活を乗り越えようと我慢した。

講義く寮の雑用く先輩の用事くクラブ活動く食事等、やつと一日が終わり夜になれば部屋ごと銭湯に通った(ちなみに一年時は四八円、四年時には二二五円が銭湯代だった)。親の背中も流したことは無かったが、三、四年生の背中を流したことも良き経験であった。寮に戻る際に、先輩達がコカ・コーラを買い、部屋でくつろぎながら飲んだ。しかし、他の部屋の上級生がキャブテン部屋に集まり、一人での対応は気苦労が多く、本当にた



▲裏側 国士館 寮歌



▲表側 教育理念と大講堂

世田谷(松陰)寮卒業記念品

昭和49年までは、4年間世田谷寮に入寮していた4年生が卒業する時に、寮生一同から記念品が贈られた。部は関係なく全員がもらえたが、昭和50年からはなぜか中止となった。真鍮で作られていて、とても高価なものである。この記念品は、筆者が2年上の先輩から託されたものである。

(大きさ:縦95mm×横190mm×奥行20mm)

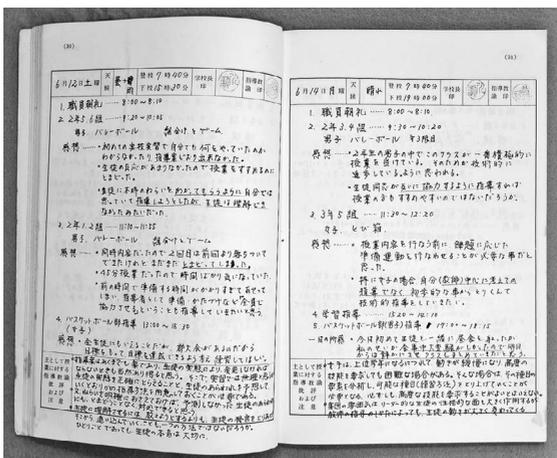
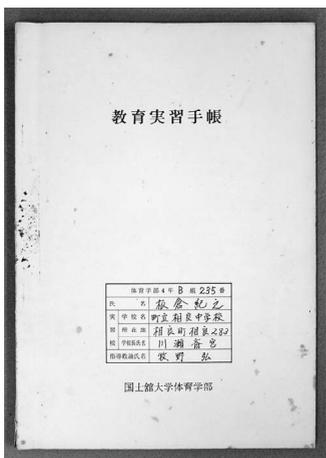
いへんであった。特に、オイルショックの余波で寮生にとってトレレットペーパーを確保することが大変であった。夜八時から朝同様に「点呼」があった。

一年生の至らなさや失敗がある度に、上級生から直接指導の「反省会」は、とにかく「忍耐」の一言であった。しかし、先輩達も通ってきた道と言われれば、自分たちも我慢しなければならぬものであると覚悟を決めて寮生活を過ごすしかなかった。たまらなく辛い時は、夜中に寮の屋上に出て、郷里の方向に輝く星を見つめ、涙を流しながら父母を思い出している自分を奮起させていた一年間であった（我ながらよく耐え抜いたと思う）。

四、大学での授業（講義・実習）

多少の運動は何でも中以上にこなせる自信もあったので体育教師の道を志した。だが、一、三年時に履修した剣道と柔道は本格的であり、基礎から学ぶと共に剣道部員や柔道部員の猛者との稽古は大変であった。

一年生は一般教養科目が中心で、三、四年生になると専門教育ばかりであり、講義を受け、万年筆で板書を書き写すだけでも大変であった。とにかく講義だけは休まず、また、居眠りもせず出席していた。



昭和 51 年 筆者の教育実習の記録

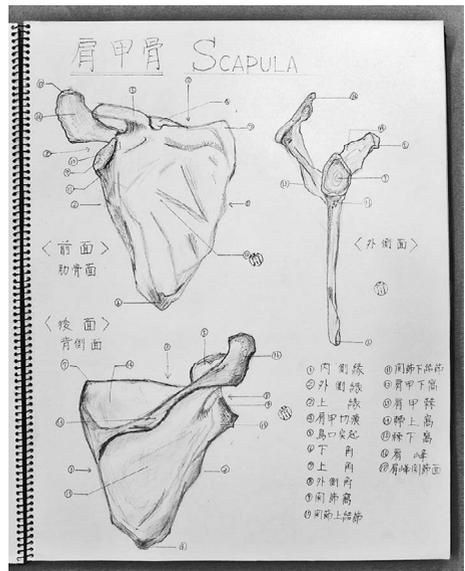
「学生監」という、いわば学級担任のような立場の先生方が講義の初めに出席カードを集め、学生達の出席状況を把握していた。

各学年の実習も貴重な体験であった。一年時には千葉県富津での水泳実習、二年時には河口湖でのスケート実習、三年時には菅平でのスキー実習を行った。スキーは、雪の降らない静岡の人間にとっては、未経験であったが楽しく学ぶ事ができた。昭和五〇年ごろは、まだ車でスキーに行くことなど一般的ではなかった時代である。

最上級生となった四年時には、母校での四週間の「教育実習」が始まった。中学卒業以来、七年ぶりの母校は懐かしかったが、見習い教師としての立場はまったく違い、毎日が緊張の連続であった。

教師に憧れ、教師になることを夢見ていた時とは違い、一日のすべての活動は「学校・生徒を第一に！」と考へなければならなかった。諸先生方から小さな事でも指導を受け、大人としての責任感とは何かを思い知らされた実習であった。

一時間の授業のために徹夜して仕上げた「指導案」も日を追うごとに慣れてきたと思ったが、毎日手直しをさせ、夜中に修正し、翌朝印刷して、指導教官に提出し



解剖生理学でのスケッチ (筆者画)

た。一時間の授業が終わると同時に、次の指導案作りの繰り返しであったが、四週間の教育実習も何とか無事終えることができた。最終日には、指導教官の先生のクラスで送別会を開いてもらい感激し、教職への志を一層強く抱いて教育実習を終えた。

全国各地に分かれて教育実習を行ってきた同級生と共に、大講堂にて学部長の先生方に体育学部三六七名を代表して報告したことも良き経験となった。

後期には東京医科歯科大学での解剖実験の実習も忘れ



1 年次 千葉富津での水泳実習（前列中央が筆者）



2 年次 山梨県河口湖でのスケート実習（前列中央が筆者）

られない貴重な体験であった。人間の身体構造や臓器の種類と各々の役割を学び、健康な身体・生命の尊厳・生きることの意味など、様々なことを考えさせられた実習であった。

五、バスケットボール部員として

私の場合、大学入学イコール寮生活は、しごく当然のことと思いい、松陰寮に入寮し学生生活が始まった。同年の部員も半数の一六名が入寮したが、一年間持たずに出て行った者や二年時に出て行った者もいて、四年間入寮していたのは、私を含め、たったの二名となっていた。

百人の部員でレギュラーの一軍(A)、次の二軍(B)、そして、残りの三軍(C)という構成であった。一年生は毎日グラウンドや駒沢公園へのランニングが基本であった。Aチームの練習のために体育館の雑巾掛けやタオル・飲み物の準備、そして、練習後の片付けと雑巾掛けであった。

二年になり後輩ができると基本的なことの指導や先輩からのきつい指摘も自分たちの責任となり、幾度となく叱りつけられた。秋からは二軍に昇格し、練習試合でも

活躍できるようになった。

三年になり一軍に昇格したが、なかなか思うようには活躍できなかった。ただ降格しないように必死になって毎日の練習に励んだ。当時のバスケットボールの聖地であり、憧れであった代々木第二体育館での試合は今でも心に強く残っている。

いよいよ四年生。前年度にチームが関東二部Bに降格したため、夏の二次合宿もコーチを筆頭に、「二部A昇格」を合い言葉に頑張った。同級生や後輩の頑張りで、リーグ優勝し、二部Aに昇格すると共に、関東一〇位でインカレ出場も果たすことができた。

一〇月から後期に入り、卒業まで半年となった。最後に残っている「卒業論文」が大きな山(課題)となっていた。石田啓教授のゼミだったので、四人の仲間で「バスケットボールの攻防」についての論文に決めた。インカレ(全日本大学選手権)の出場を目指していたものの、①国士館大学の試合はどのような攻撃であるか? ②どのようなシュートが多いのか? ③誰が、どのようなポジションでシュートして成功したか、失敗したか? 等、記録を取り分析して、バスケットボールの攻防を追求しようと考えた。

しかし、計画を立てていく内に、様々な記録を集積し



4年次 国士館大学バスケットボール2・3・4年生
(前左右から2人目が筆者、3人目は前山定コーチ)

なければならず、ゲームをしている自分たちでは無理であるため、松陰寮の後輩たちに関東大学バスケットボールリーグ戦の全記録をノートに記入してもらった。試合が終われば、すぐに記録の確認と整理をしなければならなかった。毎日の練習と大会での勝負と記録の分析とまとめ、九月～十月は本当に大変であった(のんびりと遊ぶ事など考える余裕などなかった)。

リーグ戦も好成績を上げ、念願の全日本大学選手権(大阪府立体育館にて)に出場することができた。あいにく関東一部優勝の「明治大学」との初戦であった。全日本メンバーやスター軍団の明治大学とは、体格差、能力差、経験の差等、いずれを取っても歴然の差であった。しかし、ふたを開けてみれば国士館大学が善戦し、一〇点差で敗れはしたが明治大学に一泡吹かせた。気を引き締めた明治大学が、それ以後実力を発揮し優勝して幕は閉じた。と同時に、四年生のクラブ活動も終了した。

六、国士館大学を卒業して

昭和五二年三月一八日には、新宿京王プラザにて体育学部の謝恩式を行い、教授陣の先生方や学生監の先生方

に個々の感謝の思いを伝えた（ちなみに私は仲間二人と和田任功学生監のお宅に泊めていただいた）。

三月二〇日。一〇号館剣道場にて卒業式が挙行された。郷里から父母が上京し式に参列してくれた。式も盛大に行われ、通い慣れた大学に感謝の意を込めて大講堂と正門に一礼して郷里へ向かった。

早いもので四年間の大学生活もアツという間に過ぎ去った。

「四年間、俺は何を学んだのか？」

自問自答する中で、とにかく目上の人に対しての「礼儀」は一応出来るようになったと思う。また、集団生活での自己の在り方や協力し合い、お互いを尊重し敬いながらの生活が大事であると卒業を前にして思う。いよいよ明日は卒業式だ。

自分の青春時代の楽しく辛い経験は、これからの人生に役に立つと思う。いつの日か懐かしみ良き思い出となるだろう。

「誠意」「勤労」「見識」「気魄」

この国士館大学の教育理念を肝に銘じ、これから

の人生の指針としていきたい。

昭和五二年から静岡県公立中学校の教員に採用され、保健体育科と国語科の教員を務めた。平成二七年三月、無事三八年間の勤務を終えた。自己の指導の根底では「誠意」「勤労」「見識」「気魄」が基盤となっていたと思



卒業式後に母と

てくれた父と母に感謝し、何かお礼をしてあげたい。

三月二〇日 0時23分記

（在学中のノートのメモより引用）

おわりに

う。生徒への指導はもちろん、自信をもって後輩教員にも伝えてきた。

現在は、学習支援員として中学生の支援をしているが、これからも自己が経験してきた指導理念を若い教師にも伝えていきたい。

還暦を過ぎた今、自らを鼓舞するためにも大切にしていきたい。